The story of Poppy Springs

ポピースプリングス誕生秘話

第 1 章：夢の始まり
第 2 章：募る想い
第 3 章：出会い
第 4 章：困惑
第 5 章：国境を超えた情熱
第 6 章：夢の続き

第一章 夢のはじまり

2000 年 1 月 1 日午前 0 時、ポピースプリングス・リゾート＆スパはオープン致しました。
このプロジェクトの始まりは今から約 25 年前の 1987 年頃までさかのぼります。
私は、以前より、衣・食・住のサービスを人々に提供させて頂きたい、という思いから色々と勉強し、経験を積み重ねながら、日本式温泉ホテル旅館を運営させて頂いておりました。
そんなある日、私はドイツへ旅行に出かける事になりました。
この旅行が後にこのポピースプリングスリゾート＆スパを誕生させる最初の「きっかけ」になるのです。
旅の途中で私は、バーデンバーデンという避暑地を訪れ、避暑地とリゾート、そして温泉が融合したその土地に魅了されていました。
代表的日本文化の一つである温泉をこよなく愛する私は、今まで自分が続けていた、観光ルートの一つとしての宿泊施設、宴会を中心とした温泉の利用法に、少なからずとも疑問を抱いたのと同時に、深く反省を致しました。
帰国後、私はある夢を持つようになりました。
当時の日本社会は好景気に沸き、海外旅行が日常化し、社会全体が高級化志向へと移行していました。
日本社会が巨大な変化の波に飲み込まれる中、私は一輪の花の美しさ、海、山、空、雲の美しさを感じられる心のゆとりを常に失わないよう心がけました。
しかし、変化の波は予想以上に早く、人々が道端に咲いている一輪の花に足を止め、他人とその美しさを共有する優しい心を奪っていきました。
私は日本社会がいかに変化しようとも、日本人が本来持っている心の優しさと思いやり、そして心のゆとりを常に感じられるような温かい空間を創造し、多くの人々をご招待したいという大きな夢を持つようになりました。

第二章 募る想い

時代は移り、1990 年初頭、バブルといわれた経済は崩壊し、人々は異なった形でさらに心のゆとりを失いました。私は自分の夢をどうやって具体化するか、行き詰まり、そして焦りました。そんな中、カナダに住む私の大親友である藤原氏が、一度アメリカ西海岸へ旅行に行こうと誘ってくれました。そこで、私の夢の良き理解者である石田夫妻を誘い、3 組で旅行に行くことにしました。

1996 年、春の事でした。旅の途中、カリフォルニアの爽やかで明るい空気に触れた私は、大いなる充実感に浸っていました。イギリスやフランス、そしてドイツといった煌びやかで重厚な建築様式とは違い、スペインを中心に地中海文化の影響を強く受け、開放的な雰囲気のカリフォルニアの建築様 式は私の心を一気に豊にしてくれました。多くの人々が生活の中にアロマテラピーを取り入れ、ゆっくりと時間が流れるカリフォルニアで、私は温泉とアロマテラピーという新しい温泉自然療法の一つの小さなアイデアを思いつきました。私は興奮気味に、藤原氏と石田氏に自分の夢を繰り返し話し、目の前が明るくなったような思いがしました。ただ、目の前が明るくなったとはいえ、私の夢はなかなか前に進みませんでした。私はい ろいろな所へ出掛け、多くの物を見ました。多くの人と話し、勉強しました。しかし私は自分の夢を具体化する術を見出せずにいました。

そんな中、突然藤原氏が病に倒れました。私はじっとしていられず、妻と共にカナダに出掛けました。

藤原氏の顔を見るまでは心配でしたが、お会いした藤原氏は私たちの訪問に大変喜び、病床ながらも私の夢を気にかけてくれました。又、私たちのカナダ訪問を聞き、ある男性が会いに来てくれました。その男性の名前はケン・ホリと言います。日系3世です。もう 20 年程前になりますが、彼は数週間私の家にホームステイしていた事がありました。私の家にきた時は殆ど日本語が話せませんでしたが、今目の前に居るケンは日本語ペラペラです。私たちは久しぶりの再会を楽しみました。

ケンは私たちに、ウィスラーというリゾート地に行くよう薦め、案内役をかってでてくれました。ウィスラーに到着した私はホテルのロビーをガウン姿で歩く人々に戸惑いました。そのままレストランに食事にも行くのです。とても立派なリゾートホテルでしたので私はケンに「皆、恥ずかしくないんですか？」と聞きました。するとケンは、「ここはリラックスしに来る場所です。誰もきちんとした格好などしていません。」と、言うのです。確かにその通りです。私は日本の浴衣文化を思い出しました。

私も休暇を目的とする温泉地では寛ぐ為に浴衣を着て過ごします。きちんとした格好などしません。ガウンを着たまま知らない人同士が気軽に会話を楽しみ、心地よい時間を過ごす光景を目にした私は、たとえ国やスタイルが違おうとも、寛ぎを目的とする考え方は同じなのだと改めて再認識致しました。私は目から鱗が落ちる思いでありました。

帰国後、私の夢はますます膨らみました。病床の藤原氏は私の夢を少しでも具体化しようと、あるロゴマークの入った帽子を送ってくれました。そのロゴは藤原氏自身によってデザインされたものでした。当ホテルのロゴマークの原型になったものです。私は感激しました。そして、早く自分の夢を実現させ、藤原氏を招きたいと願い、一生懸命努力しました。しかし、1997 年、藤原氏は私の願いも悲しく天に召される事となります。ショックでした。

私は大親友であり、自分の夢の大切な理解者を 1 人失うことになったのです。

第三章 出会い

　私は体調を崩しました。私は自分の夢が途絶えてしまうかと思いました。
そんな中、私の夢のもう１人の理解者である石田氏が、岡山市とカリフォルニア州サンノゼが姉妹都市という事もあり、ある建築家とサンノゼで知り合ったので、その建築家に再び会い、スケッチを描いてもらうために、サンノゼに行くと言われるのです。
私は驚きました。その建築家はデイビット・タカモトさんといい、日系３世との事でした。私はデイビットさんの事を全く知りませんでしたが、石田氏の善意に感謝し、石田氏の帰りを待つことにしました。
1998 年春のことです。
石田氏は帰国後、自分の説明がどれだけデイビットさんに通じ、どんなスケッチを送ってきてくれるのか、その一週間が非常に長く感じたそうです。
一週間後の夜。
問題のスケッチが届きました。
石田氏は朝まで待てず私に連絡をくれました。
私も朝まで待てず石田氏のところにそのスケッチを見に行きました。
そのスケッチにより、私はカリフォルニア・ミッション・スタイルと言う建築様式に出会う事となります。衝撃でした。そのスケッチは、正に私の夢が実現化しようとしている証でした。
私は自分の夢の一片を垣間見た思いがし、嬉しくて、すぐさま家に帰り、夜中でしたが家族皆を起こしてそのスケッチを見せました。その時の私はかなり興奮していたようです。
そのラフスケッチは現在当ホテルアトリウム裏の壁に展示させて頂いております。
私はデイビットさんと会いたくていてもたってもいられず、日本に招待する事にしました。
初めて見るデイビットさんは少し小柄で、それでいてがっしりとしていて、私のイメージする宮本武蔵像のようでした。
彼は仕事で、数ヶ月日本に住んだ事があるとの事でしたが、日本語は話せません。
私は自分の夢を理解してもらえるか少し戸惑いましたが、思い切って話しました。
通訳は以前、息子に英語を教えて頂いた事のある先生にお願いしました。
私は直接言葉で伝えられないと知りながら、身振り手振りをふまえ、熱弁を振るいました。
ボディーラングエッジは私の得意とするところです。
話を進めるうちに私は自分の思いが確実に伝わり始めていることを実感していました。
デイビットさんは私にいろいろな思いを話してくれるようになりました。

彼は日系 3 世としてサンノゼに生まれ、10 代の頃は第二次世界大戦後から続く、心無い日本人蔑視に遭遇し、毎日喧嘩ばかりしていたそうです。
日本に行った事もなければ、日本語も話さない自分がなぜそのような目にあうのか戸惑い、日本人には決してなりたくないと感じていたそうです。
私は深い悲しみを覚えま した。
しかし、彼は自分自身を理解し、温かい両親や多くの日本人の優しさに触れ、心より日本を、そして日本人を愛するようになったそうです。私は彼の心の強さや体から滲み出る温かさを実感し、お互い強い信頼関係で結ばれた事を感じました。1998 年 4 月の事でした。
デイビットさんはカリフォルニア・ミッション・スタイルの特徴を、基本的に壁は白く、赤い瓦屋根で窓は小さく、アーチを駆使した巧みな空間表現などいろいろ説明してくれました。そして、壁の厚さの重要性を熱心に語りました。
建物の壁の厚さは現代の建築技術をもってすれば薄くも厚くもできるそうですが、壁の厚さを表現できるのはきちんとした建築家にしか出来ないと言い、きちんとデザインしてあるものは、100 年後も、200 年後もその時代の人々が見て良いと感じるものだと力説してくれました。
1998 年 5 月、今度は私がサンノゼに向かいました。
サンフランシスコからサンノゼに向かう途中、私はあるなだらかな丘に、ひとかたまりのポピーの花を見つけました。
私はその景色の素朴な優しさと、かわいい小さなポピーに目を奪われました。
一階フロント横にある絵はその時の景色を元に描いて頂いたものです。
サンノゼで、デイビットさんはインテリアデザイナーであり、彼の妻であるレスリー・タカモトさんを私に紹介してくれました。
彼女も日系 3 世で日本語は話せませんが、日本を愛する心の温かい女性でした。
彼女は、心の豊かさを体感し、その場を離れたくなくなるような空間を日本の皆様に提供したいと言う私の思いに大いに共感してくれました。
私は、彼女のとても熱のこもったプレゼンテーションを受け、彼女から”日本の皆さんに心温まる空間を提供したい”という強い情熱を感じました。
インテリアデザイナー探しに慎重になっていた私の不安は一気に解消され、その気持は期待へと変わりました。
デイビットさんが 創り出す空間にレスリーさんがインテリアを当てはめていくという図式により、次々と素晴らしいアイデアが生まれました。

第四章 困惑

1998年10月、デイビットさんとレスリーさんが揃って来日しました。
日本一雨の少ない、この岡山県の青空を、まるでカリ フォルニアの青空と同じように感じるという彼らは、緑に囲まれ、温泉の湧き出る、ここ”湯郷”を大いに気に入ってくれました。
デイビットさんは設計を本格的にスタートさせ、レスリーさんはカリフォルニアより用意してきたベッドカバー、カーテン、カーペットのデザイン等、インテリア関係について熱心にプレゼンテーションしました。
それら全てがレスリーさんによるオリジナルデザイ ンでした。私は彼らのオリジナリティーに感嘆致しました。
1999年2月、私は再び石田氏らと共にサンノゼへ向かいました。
この時の通訳はケン・ホリが務めてくれました。
デイビットさんとレスリーさんはホテルのイメージ画を用意して出迎えてくれました。
私はその色のついたイメージ画を見た瞬間、まるで自分が完成したホテルの中にたたずんでいるような…そんなビジュアルを想像することができました。
私は自分の夢の中に入り込んだ感覚を何時までも楽しみました。
その時のイメージ画の一部は現在当ホテルアトリウム裏に展示させて頂いております。
私は自分の夢が一歩、一歩確実に前進していることを実感しながら、充実感に浸っていました。
しかし、この2度目のサンノゼ訪問も終わりに近づいた時、デイビットさんとレスリーさんのある提案を巡り私たちは激しく議論することになるのです。
デイビットさんとレスリーさんは洗面台にタイルを使うように私に提案しました。
私は目の前が真っ暗になりました。
日本生まれで日本育ちの私にとって、タイルといえば2センチ四方位の大きさで、色は薄い水色か黒みたいなものというイメージが強かった からです。
私は洗面台に関してはちょっと高級感をだして大理石でも、などと考えていただけに、タイルと聞いたときは、タイルなんて！！と思いました。
私は見た目の軽いものとなってしまうような気がしてしまい、その申し出を頑なに拒否しました。
彼らはサンプルのタイルを用意してくれていましたが、私の頭の中は大理石で一杯でした。
私は彼らの提案を拒否し、解決策のないまま日本へ帰国することになりました。
帰国後、デイビットさんとレスリーさんから部屋の内装に関して新たな提案がありました。
テレビボードやカウンターテーブルを乗せる土台を壁と同じ素材で造るというのです。
壁でテーブルの土台をつくる？？私にはどうしてもそれをイメージする事が出来ませんでした。
私の頭の中には、テーブルの土台、つまり足になる部分は木、金属もしくはプラスチックのイメージがあり、壁を土台に使うという発想は無かったので何ておかしな事を言っているんだろうと思いました。

そのうえ、ホテルの壁に関しては表面をでこぼこさせた塗り方をすると言うのです。でこぼこ？これまた私はイメージすること が出来ません。
日本人の私にとって、きちんと水平に綺麗に塗られた壁、イコールいい壁、即ち職人技のような感覚がありましたので、でこぼこと聞いた途端に拒否反応を示してしまいました。
1999年4月私は妻と共にこれで3度目となるサンノゼへと向かいました。
デイビットさんとレスリーさんは彼らの申し出を頑なに拒否していた私の為に、自宅の一部を改装して、彼らが言っているタイルと壁の使い方を実際に示してくれました。
今、皆様のお部屋にあるタイルを使った洗面台と壁を土台にしたカウンターボードなどと同じ物が、そこにはありました。
こういう事だったのです。
壁のでこぼこに関しては、光の当り方によって壁の表情が変化し、温かみのある何とも言えない立体感がでているのです。
私は感嘆のあまり、妻に言われるまで開いたままの自分の口に気がつきませんでした。
これまで私はカリフォルニア・ミッション・スタイルについて一生懸命勉強していたつもりですが、この時自分の勉強不足と、文化の違いを改めて痛感しました。
これは後で聞いた話なのですが、デイビットさんとレスリーさんは良い色が出るように何度も何度もタイルを焼き直し、また、何度も何度も壁の使い方を壁職人たちと話し合っていたようで、私がその申し出を何度も拒否した時には、その度に目の前が真っ暗になっていたそうです。
しかし、その時彼らは私が最初に言った、心の豊かさを体感し、その場を離れたくなくなるような空間を日本の皆さんに提供したいという言葉を胸に刻み、自分たちも日本の皆さんに”少しでも自分たちが生まれ育ったカリフォルニアの空気を心温まる空間にして提供したい”という思いで頑張ったそうです。
デイビットさんとレスリーさんは通常の何倍もの時間と労力を費やし、自宅の一部を改装し、ナイフやフォークのデザインにまでこだわりを持った、仕事をしてくれました。

第五章 国境を超えた情熱

このプロジェクトにあたり、レスリーさんは家具調達の為、サンフランシスコに住む彼女の友人に仕事を依頼しました。
当初、その友人はもう直ぐリタイアするから、こんな大きなプロジェクトは出来ないと断りました。レスリーさんは私の夢を代弁し、彼を説得し続けました。
レスリーさんの熱意に打たれたその友人は、リタイアを返上し、このプロジェクトに協力してくれる事になりました。
彼はカリフォルニア・ミッション・スタイルを表現するなら、スペインの影響をより強く受けているメキシコに行くべきだとし、レスリーさんと共にメキシコへ家具やインテリアアイテムの買い付けに行きました。
そこで多くのメキシコ職人にこの夢のプロジェクトの話をしました。親日家の多いメキシコの皆さんは私の夢に大いに共感し、日本の皆様の為に、丹念にソファーやランプ、そして鏡などを作り始めてくれました。
当ホテルの鏡類、ランプ類、そしてタイル類は、レスリーさんのデザインを元にメキシコ職人たちが一つ一つ丁寧に手作りしたものです。
現在、このレスリーさんの友人の彼は、サンフランシスコからメキシコに移り住み、リタイア後の人生を楽しんでいます。
1999 年 8 月、レスリーさんとサンノゼの壁職人が来日しました。
レスリーさんは壁職人と綿密に打ち合わせを繰り返し、何度も何度も壁を塗り直し、私のイメージする色を用意してくれました。
当ホテルレストランソノマの壁の色はレスリーさん本人も特にお気に入りの色です。お客様にホテルで寛いで頂きたいからと、レスリーさんが心を込めてデザインして作ってきたという部屋着も見せてくれました。今、皆様のお部屋にご用意させて頂いているお部屋着の原型になったものです。
レスリーさんが帰国後、サンノゼ、サンフランシスコ、ロサンゼルス、メキシコ等世界中から今まで用意してきたものなど、多くの家具類が日本に到着しました。
その中には、デイビットさんとレスリーさんの住む小さな町のお店のご主人たちが、町ぐるみでタイル作りや、インテリアアイテムの調達に奔走してくれたという品々もありました。レスリーさんのデザインを元にカナダの職人たちによって加工された家具類もぞくぞくと到着しました。
1999 年 11 月、レスリーさんは最後のセッティングの為、サンノゼの壁画家 2 人と共に再度来日しました。
レスリーさんは壁の最終チェックを始め、皆様方への思いを込めて各部屋ごとに部屋番号をひとつひとつ丁寧に手でペイントし始めました。
また、部屋の一部、そしてエレベーターホールの一部にも黙々とペイントを施しました。ひとつひとつ各部屋をチェックし、絵を飾り付け、キャンドル一本に至るまで注意を払い飾り付けを致しました。
最後のセッティングが終わった時、私は本当にことばでは言い表せない感情が込み上げ、石田氏をはじめとするスタッフの皆様、そして、このプロジェクトに参加してくださった全ての人々に対し、感謝の気持で一杯になりました。
こうして 2000 年 1 月 1 日午前 00 時、ポピースプリングス・リゾート・アンド・スパは多くの人々の思いを胸にスタートを切りました。

第六章 夢の続き

この、ポピースプリングス・リゾート・アンド・スパは、マーケティングの結果生まれたものでも、既製のコンセプトやシステムをそのまま持ってきたものでもありません。
ひとりの人間の小さな小さな夢を、多くの人々がひとつひとつ心を込め、そして情熱を持って実現していったものの証です。
多くの情熱を持った若者もスタッフとして私の下へ集まってくれました。
事業運営上、完璧なサービスを皆様にお届けすることは出来ないかもしれませんが、私たちはこのプロジェクトに携わって下さった全ての人々の情熱を胸に、コツコツと手作りサービスを続けさせていただき、皆様にご満足いただけるサービスを目指し、成長を続けてまいりたいと思っております。
私はアトリウムに座って皆様の笑顔を見るのが好きです。皆様の笑顔が私の心を豊かに してくれます。そんな時、私はもう一つの夢を膨らませます。
それは、このポピー・スプリングス・リゾート・アンド・スパが、皆様方おひとり、おひとりの人生において、ある小さな小さな心温まる場所として存在し続け、何か特別なお時間が必要な時には、いつでも皆様を『お・か・え・り・な・さ・い』と、笑顔でお迎えさせて頂くことです。
今夜も、私はそんな思いを抱きながら、皆様方の隣に座っているかもしれません。
そして、デイビットさんとレスリーさんも、貴方様の隣に座って皆様の笑顔と共に、楽しい時間を過ごしているかもしれません。

Fin